

序

理学療法の主要な対象は整形外科疾患，殊に筋骨格系障害である．整形外科的手術の後療法として，理学療法は必要不可欠な位置にある．理学療法士は，医師と共に手術療法の知識を身につけ，術後リスク管理の指示を受け，そのうえで身体機能の回復を目指す．こうした治療体系は歴史的にも長く，経験的な技術は，理学療法独自のノウハウとして蓄積されてきたはずである．理学療法が医学的治療の補助を成し，治療効果を最大限に生かすことは当然の役割である．

整形外科の治療技術は近年で，めまぐるしい発展を遂げ，後療法の期間は短縮しつつある．効率的な後療法が求められ，その内容はルーチンワーク化しているように思われる．この傾向は治療の発展に伴う必然であるし，誤っているとは到底考えない．けれども，果たしてそれでよいのだろうか．理学療法士という専門家として，次のステップを考えなければならない．

理学療法の位置付けとして後療法に重点を置くなら，単純である．しかし，疾病予防という観点も重要視され，治療体系のパラダイムチェンジが図られている．対象は高齢化しつつある．これだけを考えても，理学療法の役目は変わらなければならない．これらは従来から周知の事実であり，当然考慮していたという声も聞こえてきそうだが，理想論だけが先走りしている様にか思われたい．

いま，筋骨格系理学療法を見直す必要がある．変えるのではなく，まずは“見直す”のである．本書を読んで知識や技術を身につけて頂きたいというよりも，過去の良い点も悪い点もひっくり返して見直し，発展させる手だてを見つけようと試みるのである．そのヒントが本書には隠されているはずである．ここでは，執筆者それぞれに様々な思いで自由に執筆して頂いた．一見矛盾するように見えるところはあるかもしれないが，元を辿れば共通の認識で執筆されている．多様の中に一本筋が通っている．手前味噌で，はなはだ恐縮するが，なかなかの良書に仕上がったと考えている．

今回の発刊に当たり，ご協力・ご執筆頂いた著者の皆様には深謝申し上げます．今が最高であるはずはない．いつの日か，理学療法独自の専門性確立に向けて，躍進できることを期待して止まない．

2011年9月

対馬 栄輝